

「延命治療」を拒否し、18才で旅立った少女

「延命治療」の進歩で、当事者の「自分の命をどう生きるか」という新たな悩みや葛藤の問題が生じている。

その一例として、先に「番組『私の呼吸器を外してください』を見て（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（V）、2009.02.19.：参照）」を掲載した。

先日、延命治療を拒否して、自分のその選択を伝えたい、ありのままの姿を記録、取材を承諾して、18才で逝った少女を約1年半追った番組「ある少女の選択～“延命”生と死のはざままで～」を目にした。

少女は生まれた時から側湾と心臓の難病があり、8才の時に外国で心臓移植を受け、15才の時に気管切開し人工呼吸器装着で発話は困難となったが、筆談（後には携帯電話のディスプレイを使って）コミュニケーションをし、訪問医療を受けながら自宅で過ごしていた。

少女は手術、治療を長年の入退院を繰り返す中で、人工呼吸器が必要になったことを機会に、今まで通り家で「家族と当たり前の生活をしたい」と、次に治療が必要になった時は延命治療を受けたくないと決意する。

取材班の「死は怖くないの？」の問いに、少女は「天国はお疲れ様の場所でもあるから」と答える。両親も娘の意志を尊重したいと考えていた。

今年6月に腎不全となり、両親はやはり娘に少しでも長く生きて欲しいと願い、「このままだと命に関わから」と入院しての人工透析を勧めるも娘は拒否して家で過ごすことを選択し、「私らしく過ごしたいのです。もう十分頑張ってきた。自分の命は自分で決めることだし、もう追いつめないで。もう決めたことだから言わないで。」と両親に応える。

今年9月に重症の肺炎を患うも入院せずに訪問医療を受けながら、最後には両親に抱きかかえられながら意識が薄れながらも「感謝しなくちゃあ」と記して旅立った。

プロジェリアのアシュリーちゃんが旅立ったのも18才になる1ヶ月前の時（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（V）、2009.05.03.「アシュリーの生きよう（様）からの問いかけ」：参照）。

「天国はお疲れ様の場所でもあるから」の言葉に、二人の少女のように自らの宿命というか運命と向き合いながら、「生きるとはどういうことか」を自らに問い続けながら生きてきた人にのみ天国で神様が語りかける「ご苦労様」でないだろうか、ふと思った。